

# 二宮金次郎像が 全国に置かれるようになった背景

団塊の世代の人達が小学校に通っていた頃、学校には二宮金次郎の銅像がありました。

「よく働き」「よく学ぶ」こつこつと努力する姿が日本人の勤勉さを代表していた。

現在は、残っているところもありますが、かなり少なくなってきたそうです。

また、最近では、二宮金次郎が再見直しされ、金次郎像が新たに設置される学校も出始めている。



二宮 尊徳(にのみや たかのり／にのみや さんとく、天明7年7月23日〔1787年9月4日〕安政3年10月20日〔1856年11月17日〕)は、江戸時代後期の農政家・思想家。

現在の小田原市出身。尊徳の仕法は他の農村の規範となった。没後の1891年(明治24年)11月16日に従四位が追贈されている。

通称は金治郎(きんじろう)であるが、一般には「金次郎」と表記されてしまうことが多い。また、諱の「尊徳」は正確には「たかのり」と訓む。

「報徳思想」を唱えて「報徳仕法」と呼ばれる農村復興政策を指導した。

“薪を背負って歩きながら本を読む”金次郎の姿が初めて登場したのは明治24年(1891)に出版された幸田露伴の『二宮尊徳翁』という本の挿絵でした。

小田原の報徳二宮神社にある少年像は昭和3年、昭和天皇即位御大礼記念として神戸の実業家・中村直吉氏より寄進されたブロンズ像。製作者は三代目慶寺丹長。これと同じ像は、全国の小学校に向けて約一千体制作・寄贈されましたが、戦時中全て供出に遇い、現在残っているのは、この一体だけです。

尚、この像は当時のメートル法普及の意図を反映してちょうど1メートルの高さに制作されています。



中村直吉氏は、明治13年(1880)8月15日神戸市兵庫区に生れた。社会事業に非常な関心を持ち、社会事業と名のつくところには必ず顔を出して、これを援助した。

非常に深く二宮尊徳先生を尊崇し、その小銅像をつくって、神戸、明石の全小学校に寄贈した。また思想教化団体として、労働階級者をメンバーとする「養生会」を組織して指導に当り、また、兵庫実践少年団を組織し、毎日曜日には自らリーダーとなって山野を跋涉(ばっしょう)したり、社会見学を実践した。

こうした重なる徳行と、多年社会事業に尽した功労を表彰され、畏きあたりから御紋章入りの「硯箱」を下賜されている。

昭和14年(1939)1月14日逝去。

ブラジル移民の門戸神戸にあって、ブラジル行移民に援助を与え、便宜を計り、かつ日伯親善に尽瘁(じんすい)している日伯協会は、大正15年(1926)5月8日に、当時の兵庫県内務部長黒瀬弘志氏(後の神戸市長)を初め平尾鈇三郎、岡崎忠雄、川西清兵衛、小曾根貞松の諸氏等いずれも兵庫県在住の有力者が発起人となって創立されたものである。

兵庫県々会議員で、神戸取引所の常務理事をしていた、中村直吉氏も日伯協会創立以来理事の一人として協会のために力を尽すところが多かった。

ことに同氏は、神戸港から移民船が出るたびに、日伯国旗と「御健康と御成功を祈る」「ブラジル渡航記念」の文字を染めぬいた手拭一巾ずつを、移民各自に洩れなく寄贈して壮行を激励し、その数は同氏が亡くなった昭和14年(1939)1月までに、無慮13万6700本余に達している。

この行事は、未亡人たま子さんによって引継がれ、昭和15年(1940)5月日伯協会が十五周年を迎えるまでに、累計14万1597本の記念手拭が、寄贈されたのであった。

この一本の手拭の激励によって、開拓の意欲を奮起し、長年の間新しい力を与えられた人が、決して少なくないといわれており、まことに奇譚な話として顕彰したい。